

撰関期女房と文学

諸井 彩子

日本の平安時代、特に撰関期は多くのすぐれた文学作品が残された時代であり、それらは、担い手かつ享受者である女房たちの存在なしには成立しなかった。撰関期の女房に関しては、実在・非実在問わず、さまざまな研究がなされてきたが、女房の官職や呼称に関する理解が進んでいないため、実証的とはいいがたい、恣意的な解釈がまかり通っているのも事実である。

本論は、撰関期女房の官職や呼称といった実態について詳しく考察し、当時の女房がおかれた社会的な立場を明らかにすることを第一の目的としている。第二の目的は、第一の目的をふまえた上で、女房が担うと同時に享受した、世界に類をみない撰関期の文化活動全体の理解を深めることにある。女房の実態を考察することで、文学に携わった女房とその作品、女房の形成したサロンについての理解が深められ、物語の新たな解釈も可能になるのである。

第一章は、撰関期の女房の実態を総体的に捉えるための考察をまとめた。第一節は撰関期の内裏や中宮・貴顕に仕える女房集団の構成、第二節は女房呼称が父あるいは夫の官職によってつけられ、出自を表す手がかりとなるという原則を帰納法的に確認した。第三節では、東宮・中宮・斎宮・斎院・撰関におかれた実在の宣旨女房が、公的文書

としての宣旨の登場とともに、天皇に仕える典侍や掌侍と重なる職掌を担った、信頼の厚い女房であり、サロンの文化的営みにも貢献していることを指摘した。物語作品に登場する宣旨女房にも、その反映がある。第一節と第二節をふまえ、散逸物語『みかはにさける』を捉え直したのが、第四節である。この散逸物語は、題名とそのもとなつた和歌から、道長・頼通時代以降に成立したものと考えられ、出自の高い女房が男主人公の相手として設定されている点で現存する作り物語とは異なった特徴をもつ。当時の物語の作り手でもあり享受者でもあつた受領層の女性たちにとって、自分たちと地続きかつ憧憬の対象でもある上臈女房の恋愛を味わうためのものであつたろう。第五節では、女童と一人前の女房の服装や職務の違いを明らかにしながら、女房の裳着について考察した。あこぎの裳着が物語中に示されることは、あこぎが主人夫婦に大きな信頼を寄せられていることの表れであり、『落窪物語』は女房としての理想像を描いた物語という側面もある。第六節では、〈召人〉の実態を当時の記録に即して実証的にまとめ、定義づけを行うとともに、物語作品における〈召人〉に言及した。

第二章は、撰関期のサロンについて考察した。平安時代のサロン活動の成果は、歌（歌合・私家集）や物語、絵など多岐にわたり、統一的な評価の方法を見いだすことが困難であつた。第一節は、撰関期のサロンの構成員やその成果を考察することで、サロン活動の評価の方法を改めて提示した。撰関期のサロンは、貴人女性とそこに仕える女房を核とし、父や夫といった後見人、あるいは男性官人が集って形成

された社交形態である。その具体例として上東門院彰子のサロンについて再考したのが第二節である。平安時代のサロンの女主人とは、必ずしも当人が文学的営みのリーダーであるわけではなく、文学的営みを行う人々を支える存在であった。彰子は父道長と母倫子の協力のもと、女房たちを支えてサロンの活動を活性化していた。このサロンで育った女房たちが次代の文化活動の核を担っていくのである。第三節は、『赤染衛門集』の解釈をふまえ、道長の指示のもと、女房たちの共同作業で物語が作られていたことを明らかにした。道長周辺で作られた物語は『源氏物語』だけでなかったことが注目される。第四節は『栄花物語』成立の一端を捉えようと試みた。彰子の妹、妍子のサロンであり、禎子内親王に仕えた乳母である弁乳母とその姉である弁内侍の關係を中心に、『栄花物語』正編の執筆を可能にした女房ネットワークについて考察した。これらの具体的な考察から、摂関期サロンの本質を集団的文化活動と捉えることができる。

第三章は、女房歌人の経歴を再考する論文を集めた。第一節は、紫式部の娘であり、後冷泉天皇の乳母として活躍した大式三位藤原賢子の出仕時期を考察した。女房呼称等をふまえると、二十歳を越えた時期に彰子のもとに出仕したと考えられる。第二節は、赤染衛門の娘、江侍従の経歴を和歌活動中心に再考するとともに、第一章での女房の実態をふまえることが、女房歌人を考察する上でも有効であることを示した。同様に第三節は、威子・章子内親王二代にわたって宣旨をつ

とめ、彰子内親王の乳母でもあった二条院宣旨の人生を明らかにした。

以上の女房の実態とサロンの考察により、撰関期の文学は、女房を中心とした集団文芸性を念頭に置くべきことが明らかになった。これは、作者個人の独創的な思想の表れとみなす近代的な文学作品の捉え方とは、全く異なったもので、近代の文学のあり方を相対化する意味でも意義のある考察といえよう。